

海外のノンネイティブ日本語教師のための 日本語集中講座の実践

福岡 昌子

The Practical Report of Japanese Intensive Lectures for the Nonnative Japanese Language Teachers

FUKUOKA Masako

〈Abstract〉

At the Center for Education and Research, "The Winter Intensive Lectures on Japanese Language for Overseas Japanese Teachers" have been delivered since 2010. It is provided for non-Japanese teachers teaching Japanese at elementary schools, junior high schools, and high schools. This year the program received a request from an overseas friendship university.

The lectures were planned following extensive discussions with the lecturers of the University of the Tasmania. It focused on two points: i) Improvement in Japanese conversation and listening ability and ii) Understanding of the latest Japanese situation and Japanese culture from an external viewpoint. Further, the short program included individual research presentations by all participants and field trips.

キーワード：非母語話者、海外の日本語教師、日本語集中講座、日本事情、スキルアップ

1. はじめに

海外の日本語教育機関で日本語を教えるノンネイティブの日本語教師は多い。オーストラリアの場合、第2言語として早くから日本語指導が行われており、小学校や中学校で日本語を教える非常勤講師やボランティアの日本語教師の活躍もめざましく、日本語の普及に大きく貢献している。小学校や中学校のときに日本語を学習したのがきっかけとなって、第2言語として日本語を学び、短期や長期の日本留学を目指す日本語学習者も少なくない。

本稿では、本大学の海外協定校の一つであるオーストラリアのタスマニア国立大学アジア言語研究科より依頼を受け実施した「海外の日本語教師のための日本語集中講座」の実践報告を行う。

2. 本講座の目的および海外のノンネイティブ日本語教師の日本語指導

本講座を進めるにあたり、海外協定大学からの要望として挙げられた指導項目は、①日

本語運用能力の向上、特に聴解と会話のレベルアップ、②異文化理解の視点から最近の日本事情や日本文化の理解、という点であった。これらの2点を中心に講座を組んだ。

本センターでは、2006年度から2008年度において短期留学から長期留学をめざす留学生の獲得を図るため、国際交流センターの日本語教育と国際交流の教員とが協力し、海外の協定大学の留学生を対象に、約1ヶ月間ホームステイをしながら日本語と日本文化を学ぶ「サマースクール」を開講した⁽¹⁾。本講座を実施する際には、これまでの経験と実績を生かし展開が可能であると判断した。今回の対象は現役の小中学校の日本語教師ということで、受講者の日本語のレベルアップを目指すとともに、現在の日本文化や社会事情の学習内容を盛り込みながら、小中学校訪問、座禅や茶道体験等の学外研修、そして、研究発表を最終目的とする学習活動を加えることとした。

2011年度においては、2010年度好評であったカリキュラム全体の枠組みを大きく変えずに、協定大学担当教員より要望のあった評価システムを導入することにした。これまで日本では国際交流基金日本語国際センターが中心となって、長期間にわたり海外日本語教師を対象とした短期研修を実施し、日本語や日本語指導力の向上が図られてきた。近年、国際交流基金日本語国際センターでは「JF日本語教育スタンダード」を試行し、実施してきた「総合日本語」の見直しが行われている。「JF日本語教育スタンダード」では、「コミュニケーション能力の獲得と異文化理解の連携を重視した相互理解のための日本語」を目指す取り組みが行われた。その趣旨は、本講座の日本語指導における趣旨と一致するものであったため、特に評価システムを参考にして実施した。

なお、2011年度は、当該協定大学のアジア言語研究科に在籍する大学3年生も対象に、日本語の集中講座を開講することになったため、ノンネイティブの日本語教師と大学3年生の日本語集中講座の2講座を、同時期に並行して実施することとなった。さらに、本事業は、独立行政法人日本学生支援機構の留学生交流支援制度「ショートステイ」プログラムに採択されたことにより、2講座の内の8名がこのプログラムの支援を受け受講することとなった⁽²⁾。

3. 2010年度および2011年度の日本語集中講座の実施時期、対象者、主な指導項目⁽³⁾

(1) 2010年度「日本語教師のための冬季日本語集中講座」

時期：2011年1月6日(木)～1月21日(金)

対象：タスマニア大学大学院アジア言語研究科に所属し、小学校・中学校・高校で教鞭をとるノンネイティブ日本語教師 5名(男性1名、女性4名)

(2) 2011年度「日本語教師のための冬季日本語集中講座」

時期：2012 年 1 月 5 日（木）～ 1 月 20 日（金）

対象：タスマニア大学アジア言語研究科に所属し、小学校・中学校・高校で教鞭をとるノンネイティブ日本語教師 7 名（男性 1 名、女性 6 名）

なお、2011 年度参加者のうち 5 名は、2010 年度のリピーターであった。

（3）指導項目

本講座の指導内容は、2 でも述べたように、①日本語運用能力の向上、特に聴解と会話のレベルアップ、②異文化理解の視点から最近の日本事情や日本文化の理解を目標としており、次の 7 点がその主な特徴である。また、このカリキュラムは、読む・書く・話す・聞くの 4 スキルの実力向上、特に、話す・聞くのスキル向上を目指した。下記の内容をまとめたものを一冊のテキストにして渡日後に配布した。

①「実践日本語」：依頼する、承諾する、断る、申し出る、お礼とお詫び、電話をかけるなど、場面や状況に応じた機能別表現を実践的に学ぶ。（『聞いて覚える話し方 日本語生中継 初中級 2』（くろしお出版）、『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』（スリエーネットワーク）、『なめらか日本語』（アルク）他なども参考にして、聴解および会話を行った。）

2011 年度は、前年度をレベルアップさせたものとして、敬語を使った機能別表現を学ぶことにした（『にほんご敬語トレーニング』（ask））。

②「日本事情」：若者の仕事意識と就職活動、日本における子供の教育と塾、日本のマンガ文化、稽古事が好きな日本人など、現在の日本社会と文化を学び、日本人学生チューターとのディスカッションを行った。

③「研究発表」：各自研究発表のテーマを設定し、インタビューやアンケート調査などを行って、パワーポイントにまとめて発表した。『アカデミックプレゼンテーション入門』（ひつじ書房）、『インタビューで学ぶ日本語』（凡人社）などの教材を参考とした。

④「学外研修」：本学の茶道サークルでの茶道体験、四天王寺の座禅体験、本学付属小学校との交流、近隣幼稚園「絵本の読み聞かせ体験」を行った。事前に、茶道や座禅について学んだり、各自選んだ絵本を読んだりする練習も行った。

⑤「ウォーミングアップ」：毎朝ウォーミングアップ授業として、聴解テープを聞いたり（『新毎日の聞き取り 50 日下』（凡人社））、「新聞記事」を各自選んで発表し、意見を述べ合った。2011 年度は、読売オンラインから提供されている新聞記事を予めテキストに挟んだ（『読売ワークシート通信』読売新聞）。

- ⑥その他 : 「学外研修」終了後には、訪問機関ごとに担当者を決め、お礼の手紙を書くことを課題にした。
- ⑦特別企画 : 本事業は、独立行政法人日本学生支援機構の留学生交流支援制度「ショートステイ」プログラムによる2次募集の採択事業であるため、「東日本大震災の復興支援」を盛り込む必要があった。そこで、「東日本大震災の復興支援」シンポジウムとして医学部ボランティア学生による支援活動の報告会が実施された。「思い出探し隊」として被災地に赴き、瓦礫の中から写真や記念の品々を探し、持ち主に返すというボランティア活動について話をした。また、震災について受講者および日本人学生チューターとの意見交換やディスカッションを行った⁽⁴⁾。
- (4) 指導体制 : 両年度ともコーディネーターは一人であるが、2010年度の全授業は一人の教員が担当し、2012年度はチーム制を組んで数名の教員が指導を行った。下記の国際交流センター教員（元非常勤講師含む）が担当した。2011年度は複数の教員が携わるため、メールによる意見交換、個別打ち合わせ、全体ミーティング（1回）を行った。
- 2010年度 コーディネーター：福岡昌子、担当教師：勝田順子
- 2011年度 コーディネーター：福岡昌子、
担当教師：太田慶子、大野陽子、仲渡理恵子、福岡昌子、森 陽子
- (5) チューター制：このコースは、受講者1名に本学の日本人学生チューターが1、2名つき、滞在中交流を行った。日本人学生チューターは、「日本事情」の授業でディスカッションに参加したり、「学外研修」に一緒に参加したり、「研究発表」では発表の準備作業をサポートしたりした。講座の前に、チューターを募集し、ミーティングを行い、スカイプで事前交流を図った。リピーターの受講生がいたことで、2年継続してチューターをしてくれる日本人学生もいた。

4. 2010年度および2011年度の海外日本語教師のための日本語集中講座カリキュラム

2010年度および2011年度の「海外日本語教師のための日本語集中講座」のカリキュラムは、表1のとおりである。

表 1 2010 年度および 2011 年度「海外日本語教師のための日本語集中講座」

2010 年度「海外日本語教師のための日本語集中講座」

				1/6 (木)	1/7 (金)
1/2 9:00 ～ 12:00				9:00～9:30 開講式 オリエンテーション [実践日本語-1] 1課 自己紹介	①聴解②新聞 日本事情-1 冠婚葬祭 (導入、意見述べの練習)
3/4 13:00 ～ 16:00				12:00～13:00 歓迎会 13:00～ 学内案内 ★チューター5名(以下、★チ)	[研究発表準備-1] 発表例紹介(職業編)、テーマ 選び
	1/10 (月)	1/11 (火)	1/12 (水)	1/13 (木)	1/14 (金)
1/2 9:00 ～ 12:00	祝日	①聴解②新聞 [実践日本語-2] 依頼する・承諾する・断る (聴解、会話)	①聴解②新聞(発表テーマ提出) [実践日本語-3] 申し出る(聴解、会話) ・伊勢型紙見学事前授業	①聴解②新聞 [実践日本語-4] お礼とお詫び(聴解、会話) ・伊勢型紙見学お礼の手紙を 書く	センター試験準備
3/4 13:00 ～ 16:00		日本事情-2 会社、就職活動(導入、チュ ーターとのディスカッション) ★チ 3	学外研修1: 伊勢型紙見学 ★チ 5	[研究発表準備-2] 発表の資料作成	
	1/17 (月)	1/18 (火)	1/19 (水)	1/20 (木)	1/21 (金)
1/2 9:00 ～ 12:00		①聴解②新聞 [実践日本語-5] 意見を述べる(聴解、会話)	日本事情-4 現代の子供「絵本の読み聞か せ」 学外研修4: 北立誠幼稚園での 実践(読み聞かせ) ★チ 3	①聴解②新聞 [実践日本語-6] 電話をかける(聴解、会話)	[研究発表] (コンピューター室) 研究発表 ★チ 5
3/4 13:00 ～ 16:00	日本事情-3 茶道「千利休が目指した 茶道とは」 学外研修2: 茶道部で実践	学外研修3: 付属小中学校訪問(バス) (宿題: お礼の手紙)	幼稚園での実践のフィードバ ック及び「現代の子供」につ いての日本事情 ★チ 3	日本事情-5 日本の政治(導入、チューター とディスカッション) ★チ 3	12:00～12:30 修了式 12:30～13:30 送別会 ★チ 5

2011 年度「海外日本語教師のための日本語集中講座」

				1/5 (木)	1/6 (金)
1/2 9:00 ～ 12:00				9:00～9:30 開講式 福岡 オリエンテーション、自己紹介 [研究発表準備-1] テーマ選び、発表方法、発表例	ウォーミングアップ: 読解 日本事情-1 稽古事が好きな日本人
3/4 13:00 ～ 16:00				12:00～13:00 歓迎会 13:00～ 学内案内 ★チューター5名(以下、★チ) ショートステイプログラム手続き	学外研修-1 茶道体験(表千家) 13:30、日本語教師グループ (三重大学茶道クラブ)
	1/9 (月)	1/10 (火)	1/11 (水)	1/12 (木)	1/13 (金)
1/2 9:00 ～ 12:00	祝日	ウォーミングアップ: 聴解 [実践日本語-1] 意見を述べる(聴解、会話)	ウォーミングアップ: 読解 (発表テーマ提出) [実践日本語-2] 依頼する・承諾する・断る (聴解、会話) ・座禅体験事前授業	ウォーミングアップ: 聴解 (絵本選び) [実践日本語-3] お礼とお詫び(聴解、会話) ・座禅体験のお礼の手紙を書く	センター試験準備
3/4 13:00 ～ 16:00		日本事情-2 若者の仕事意識と就活 (導入、チューターとのディス カッション) ★チ3	学外研修-2 四天王寺で座禅体験 (バス)	13:00～15:00 ★チ 3 震災復興支援シンポジウム 15:00～17:00 [研究発表準備-2] ★チ 3	
	1/16 (月)	1/17 (火)	1/18 (水)	1/19 (木)	1/20 (金)
1/2 9:00 ～ 12:00	ウォーミングアップ: 読解 日本事情-3 子供と教育 (訪問のための事前準備)	ウォーミングアップ: 聴解 (お礼の手紙提出) [実践日本語-4] 申し出る(聴解、会話)	ウォーミングアップ: 読解 [実践日本語-5] 電話をかける(聴解、会話)	ウォーミングアップ: 聴解 [実践日本語-6] スピーチをする(聴解、会話)	[研究発表] (コンピューター室) 研究発表 ★チ 5
3/4 13:00 ～ 16:00	学外研修-3 付属小中学校訪問(バス) (宿題: お礼の手紙)	日本事情-4 子供と塾(導入、チューター とのディスカッション) ★チ 3	[研究発表準備-3] 発表の資料作成(各自) ★チ 3	学外研修-4 北立誠幼稚園での実践(読み 聞かせ)と交流(徒歩)	12:00～12:30 修了式 12:30～13:30 送別会 ★チ 5

3（3）指導項目で示したように、2010年度は、①「実践日本語」6回、②「日本事情」5回（2回は日本人学生とのディスカッション）、③「研究発表および準備活動」3回、④「学外研修」4回（学内茶道体験含む）、2011年度は、①「実践日本語」6回、②「日本事情」4回（2回は日本人学生とのディスカッション）、③「研究発表および準備活動」4回、④「学外研修」4回を実施した。

5. 2011年度の評価システムについての検討

2011年度は、タスマニア大学からの要望もあり、2010年度の評価システムについて見直しを図り、「実践日本語」、「日本事情」、「研究発表」、「学外研修」では、それぞれのタスクについて評価を行うことにした。さらに、タスマニア大学からコメントを得て、表2の評価配分となった。

また、ポートフォリオとして「日本事情」のレポートや「研究発表」で作成したパワーポイント資料、「学外研修」でのお礼の手紙やレポートも、評価の対象とした。「実践日本語」の会話小テストでは学習した会話表現が適切に使えているか、教師との会話テストを実施した。全体的に「話す」「聞く」に関するスキルの評価ポイントを高く設定した。毎朝のウォーミングアップとしての「聴解」や「新聞記事の発表」は、評価には入れなかった。

さらに、「日本事情」における日本人学生とのディスカッションでは、表3のように、対話力評価チェックリストを作成し、受容的対話能力⁽⁵⁾や社会言語能力、ストラテジー能力が十分に使われているか見ることにした。また、この評価方法については、初日のオリエンテーションにおいて、説明および簡単な指導を行い、日本人学生チューターとのディスカッション授業の際に、担当教員が評価することにした。

表2 2011年度の評価システム

1. 実践日本語（6回）	①会話小テスト（最終回）	20%
2. 日本事情（4回）	①ディスカッション	20%
	②レポート（A4：1～2枚）	20%
3. 研究発表（4回）	①発表（スピーチ、発表内容）	15%
	②パワーポイント	15%
4. 学外研修（4回）	①お礼の手紙	10%
5. その他（各4回）	①「新聞記事」読解	0%
	②「聴解」	0%

表3 対話力評価チェックリスト（第1回～第4回ディスカッション）

教員氏名：

（よくできた：5 難しいが何とかできた：4 普通：3 あまりできなかった：2 できなかった：1）

	項 目	説 明	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	合計	備考
1	内容（関連付け・理由説明・意見提示）	関連事項について、根拠を示して説明し、自分の意見をはっきり主張できた。							
2	展開（意見述べ、推論述べ）	相手の反応や意見、推論に対応して、それに対してコメントや推論を述べて、議論の進展に寄与できた。							
3	展開（質問への対処）	質問をしたり、質問に答えたりする際に、相手にわかりやすく話をすることができた。							
4	展開（関連づけ）	自分の話を、他の話し手の話にうまく関連づけることができた。							
5	ストラテジー（修正）	説明が不十分だったり、誤解を引き起こしてしまった場合など、うまく修正できた。							
6	ストラテジー（あいづち）	相づちをうまく使えた。							
7	表現（語彙・表現）	適切な語彙や表現が思い浮かばなかったとき、うまく言い換えをして伝えることができた。							
8	社会言語能力	その場の状況や、聞き手に応じて、内容、話し方を調節し、その場の状況にふさわしい言葉遣いができた。							
9	表現力（接続詞）	自分の論を明確に展開するために、様々な接続表現を効果的に使うことができた。							
10	発音	はっきりとした自然な発音やイントネーションで話すことができた。							

（参考：『JF 日本語教育スタンダード（2010）V-3 ソウル日本文化センター一般上級日本語講座』一部改訂）

6. 2010 年度、2011 年度アンケート調査結果

6.1 2010 年度アンケート

(1) 今回の日本語集中講座は、全体的にいかがでしたか。

① (100%) とてもよかった ② () よかった ③ () 普通 ④ () よくなかった

(2) 日本語の授業の何がよかったですか。上位3位

①会話の授業 ②聴解の授業 ③日本事情の授業、チューターの入った討論

(3) 日本語や日本事情の授業で、今度もっと勉強したいことは何ですか。

①日本語の授業：文法や漢字、②日本事情：日本の若者について、若者ことば

(4) 学外研修は、どこがよかったですか。上位4位

①幼稚園で読み聞かせ体験 ②学校見学 ③伊勢型紙 ④茶道体験

(5) チューターと勉強して、何がよかったですか。

①日本語をたくさん使った。②勉強を助けてもらった。③楽しく勉強できた。

(6) この日本語集中講座の期間の長さは、どうでしたか。

① () 長い ② (40%) 短い ③ (60%) ちょうどよい

(7) また、このような日本語集中講座に参加してみたいですか。

① (100%) はい ② () いいえ

(8) 宿泊先は、どうでしたか。

・A ウィークリーマンション：適当。静かでよかった、自転車が借りられればよかった。

・B ホテル：とてもよかった。

(9) 改善点があれば、お願いします。

・コンピューター室を使える時間がもう少し長くしてほしい。

・研究発表を準備する時間が余り取れなかった。インタビューの授業では、学外の人との接触が難しかった。

(10) 全体的な感想をお願いします。

・とても楽しい体験だった。

・日本語や日本文化・日本事情がたくさん学べてよかった。

・先生の授業はとてもフレキシブルで、私たちが本当に習いたいことを教えてもらった。

・コンピューターを持参してくればよかった。

・今度は苦手な文法も勉強したい。

・日本人学生チューターと楽しく話したり、研究発表などいつも勉強を助けてくれたりしたのがよかった。

6.2 2011 年度アンケート

(1) 今回の日本語集中講座は、全体的にいかがでしたか。

① (29%) とてもよかった ② (57%) よかった ③ (14%) 普通 ④ () よくなかった

(2) 日本語の授業の何がよかったですか。上位 3 位

①チューターの入った討論 ②ウォーミングアップ（聴解・会話） ③日本事情

(3) 日本語や日本事情の授業で、今度もっと勉強したいことは何ですか。

①日本語の授業：会話、文型練習 ②日本事情：若者の生活、スポーツ、社会問題

(4) 学外研修は、どこがよかったですか。上位 4 位

①座禅体験 ②学校見学 ③幼稚園で読み聞かせ ④茶道体験

(5) チューターと勉強して、何がよかったですか。

①日本語をたくさん使った。②勉強を助けてもらった。③楽しく勉強できた。

(6) この日本語集中講座の期間の長さは、どうでしたか。

① () 長い ② (28%) 短い ③ (72%) ちょうどよい

(7) また、このような日本語集中講座に参加してみたいですか。

① (86%) はい ② (14%) いいえ（夏休みは少し休みたいから）

(8) 宿泊先は、どうでしたか。

・ A ウィークリーマンション：とてもよかった。

・ B ホテル：とてもよかった。

(9) 改善点があれば、お願いします。

・教材が少し多かった。

・今後は宿題にしてもよいから、予習をしっかりしたい。

(10) 全体的な感想をお願いします。

・日本語の聴解力や会話力のレベルアップに役立った。

・会話の練習にもっと時間をかけたかった。

・日本人学生チューターと楽しく話したり、研究発表などいつも勉強を助けてくれたりしたのがよかった。

・日本事情や日本文化がたくさん体験できてよかった。

7. 考察

本事業は、本学の協定大学より依頼があり連携を組みながら実施したものである。受講者はノンネイティブの現役の日本語教師で、大学院に所属しながら、オーストラリアの小中学校で第 2 言語として日本語を指導している。また、受講者の日本語レベルは、日本語

能力試験 2、(3) 合格者で、日頃自分の日本語をブラッシュアップしたいと思いながらも、なかなか実現できないでいる日本語教師である。

2010 年度は、初年度ということもあり、送り出す協定大学の教員や受講希望者のニーズもつかめない手探りの状況であったが、日本語の聴解と会話を中心に、日本文化と日本事情、研究発表、学外研修という 4 点を軸に組んだことが好評を得ることができたと思われる。そして、感想にもあったように、何よりも受講者のレベルがばらばらであったにもかかわらず、授業担当者がフレキシブルに授業を展開した点にある。

2011 年度は、前年度の内容に、受講者への評価システムを加えた。2 年継続して参加される受講者に配慮し、直前に指導内容および学外研修先を変更することにした。また、今回は数名の教員でチームを組んで指導を行うことが結果にどう現れるか懸念されたが、無事終了することができた。リピーター向けに授業内容をステップアップさせた点が逆に受講者には負担であったようだ。しかし、カリキュラム、実践日本語や研究活動、学外研修を含む指導内容、チューターの体制ともに充実した内容であるとの好評を得ることができた。サマースクールと違って全学向けの日本語授業が展開されている学期中に、同時進行の形で本講座が行われたため、コーディネーターや非常勤講師への負担が大きかったように思われる。事業を継続するためには、どのような体制が望ましいか、今後検討する必要がある。

評価システムは、協定大学が本学で学んだ結果である成績を持ち帰って単位に換えるため、短期の日本語講座とはいえ重要なことである。「対話力評価」については、講座では受講者にコミュニケーション能力をつけてもらうことが目的の一つであるため、その評価方法を示し実施することは必要なことであった。しかし、その詳細な指導方法や評価方法については、教員間で十分に検討することができなかったため、この点も今後の課題としたい。

海外の日本語教師は、日本語教育の将来への貢献度は非常に高いと思われる。現在、国際交流基金を中心に現役日本語教師の指導が行われているが、個々のニーズに応えた指導という点では、本講座のような協定大学との連携による実施が今後も展開可能ではないかと思われる。そのためには、学内の日本語教育の一本化が重要であると思われるが、今後でもできる範囲で更なる事業の展開を図っていきたい。

注

1. 国際交流センターでは、2006 年から 3 年間「三重大学夏季日本語日本文化研修サマースクール」を開講した。ドイツおよび中国の海外協定校大学の学生が、夏休みを利用して三重県でホームステイしながら、国際交流センターで日本語と日本文化を学ぶ講座であり、ホストファミリーや受

講者より好評を得た事業である。『三重大学夏季日本語日本文化研修サマースクール 2007 報告書』(2008) 参照。

2. 2011 年度における独立行政法人日本学生支援機構の留学生交流支援制度「ショートステイ」プログラムにおいて、本講座に関連させて申請した「三重大学：今の日本社会と文化を学ぶ協働学習プログラム」が採択された。そのため、日本語教師のための日本語冬季集中講座からは 2 名、大学 3 年生のための日本語集中講座からは 6 名がこのプログラムの支援が受けられることとなった。奨学金受給者の選考にあたり、渡日前に文法および日本文化や日本事情に関する成績から受給者を決定した。
3. 本事業の経費としては、2010 年度は 60 万円、2011 年度は 100 万円である。2011 年度は、「大学 3 年生の日本語集中講座」も同時に実施した関係で、経費が上乗せされた。なお、この経費の中には、テキスト代、講師謝金、チューター謝金、学外研修の参加経費、懇親会および送別会費等が全て含まれている。なお、留学生交流支援制度の事業採択による支援受給者以外に、本講座に参加者が負担する費用は、渡航費、宿泊費は自己負担である。
4. 受講者の中には、本事業の「東日本大震災の復興支援」シンポジウムの数日後に、かつて英語教師として働いた被災地に赴き、建物の上に船が存在する津波による震災の凄まじさについて語る者もいた。
5. 「受容的対話能力」とは、村松（1998）によれば相手を理解するための受容的な対話能力のことであり、その指導方法は、受容→対立（相手の話を自分の経験や考えを照合して聞くことによって自他の相違を明らかにし、互いに意見を述べ合う）→融合（双方が納得できる解決策を生み出すために冷静に粘り強く話し合う）の三段階で行うべきだとする。本講座における会話能力の育成において、相手の話に耳を傾け、相手が何を言いたいのかしっかり受け止め、理解し合う「受容的対話能力」の育成が必要であると考え、会話の技術の向上を目指した練習も授業の一部に加えた。福岡（2003）参照。

謝辞：本講座の実施にあたり、タスマニア大学教員の皆様、受講生の皆様、2010 年度および 2011 年度、担当された教員およびチューターの皆様に心より感謝致します。

参考文献

1. 『JF 日本語教育スタンダード V-3 ソウル日本語文化センター一般上級日本語講座』（2010）[PDF] www.jpff.go.jp/j/urawa/j_rsrcs/standard/dl/trial05-3.pdf（国際交流基金）
2. 福岡昌子（2003）「インタビュー聴解授業における受容的対話能力の育成に関する研究」『三重大学留学生センター紀要』第 5 号、15－27。
3. 『三重大学夏季日本語日本文化研修サマースクール 2007 報告書』（2008）三重大学国際交流センター
4. 村松賢一（1998）『今求められるコミュニケーション能力』明治図書出版
5. 『読売ワークシート通信』<http://yomiuri-education.jp/>（読売新聞）